

ウツボグサ（カゴソウ）

牧 幸 男

8月、この言葉を聞くと、大人は暑さの盛りを思い出し、子供達は夏休みの過ごし方に思いをはせる。私の子供の頃の夏休みは、今でも楽しいことばかりが印象に残っている。当時、寝る時、明日は何をして遊ぶのか、そんなことばかり考えていた。夏休みの宿題は全く気にならず、遊ぶ楽しみを優先し一番嬉しい時は夏休みであった。一方、植物にとって夏は一番の成長期であり野も山も万緑となっている。全ての生物が、信州の短い夏を謳歌する時、この夏に背を向けるようにして枯れてしまう植物に、ウツボグサがある。独特の紫色の色が周辺の緑に映えるのと、花の形が唇のような形で非常に可愛らしさ感じさせる植物である。しかし、花の最盛期が梅雨の時期で、本格的な夏には枯れてしまうので、関心を示す人は少ないかもしれない。

ウツボグサは、北半球の温帯に広く分布し、日本各地の日当たりのよい山野の草地に普通に見られるシソ科の多年草である。高さ 10～30 cm、茎は四角形で根ぎわから叢がり生え、直立又はやや斜めに枝分かれする。茎葉、花序に白色の粗い毛がある。花期は6～8月頃、茎の先端に角ばった花穂をつけ、紫色の唇形花を密集して付ける。真夏になると花穂はすぐ暗褐色に変化する。この植物は、花が上の方から咲き始めて、だんだんにその穂の下に咲き、一番下に小花をつける頃には、もう上の方は枯れはじめ茶褐色となり、その花穂の形を何時までも残しているのが特徴である。花後、根元から茎を四方に伸ばし、地を這いその先端に苗ができる。



咲き始めの頃



咲き終わりの頃



ウツボグサの咲く姿

花の最盛期が梅雨の時期のため、多くの人の目に触れるのが少なく、地味な植物かもしれない。そのため詩歌に詠まれることが少ないようである。

←花後のウツボグサ

なつかしき 春の形見か うつば草 夏の花かや 紫にして 与謝野晶子

路下の 厩の屋根の うつば草 馬がいるら 脚だけが見ゆ 前田夕暮

切り拓き 明るき林 靱草 石昌子

雨に揺れ 蛇にゆれけり うつば草 堀口星睡

植物名は、中国の医師の朱震亨（1281～1358）は、夏枯草の名前の由来を「この草は夏至が過ぎると枯れる。蓋し、純陽の気を禀けたもので、陰気に遭えば枯れる。故にこの名称がある」と述べている。

牧野富太郎博士は、「蓋し、純陽の気を禀けたもので、陰気に遭えば枯れる。生薬の夏枯草の矢を入れて腰につけ持ち歩いている時、^{うつぼ} 靱 という筒型の容器に似ている故にこの名称がある。和名は、^{うつぼくさ} 靱草」と述べている。別名は夏枯草、アブラグサ、カゴグサ、クスリグサ、ジビョウグサ、チドメグサなど薬効にまつわる植物名が多い。別名のカゴソウは、この植物を保存する時、乾いた花穂が籠に見えたのである。また、国内では民間療法でよく使われていたので、地方独特の植物名が多い。長野県ではヘビノマクラと呼ぶところがある。

学名は *Brunella vulgaris* で、属名は、ドイツ語の扁桃腺炎の語原で、種小名は普通の意で、古くから治療に良く利用されてきたからである。英名では Sefheal(治す)と呼ばれている。

薬用は、この植物が漢方の要薬で、中国最古の医学書『神農本草経』（250～280 年頃編纂）の下品に「夏枯草」の名前で収載されているので、非常に古い生薬と言える。

我が国では、江戸時代からよく利用され、『和方一萬方』（1781）や『救民単方』（1851）には主に淋病に、民間療法では消炎利尿、口内炎、扁桃炎、結膜炎に利用すると記述されている。現在『日本薬局方 18』に収載され、カゴソウ *Prunella Spike PRUNELLAE SPICA* ^{かご} 夏枯草 ^{そう} 本品はウツボグサ *Prunella vulgaris* Linné var. *lilacina* Nakai (Labiales)の花穂である。生薬の性状は、本品はほぼ円柱形で麦穂状を呈し、長さ 3 ～ 6cm、径 1 ～ 1.5cm、灰褐色である。花穂は多数の苞葉及びがく筒を付け、上部にはしばしば花冠が残存する。通例、がく筒中に四分果があり、苞葉は心臟形～偏心臟形で、がくと共に脈上に白色の毛がある。質は軽い。本品はほとんどにおい及び味がない。生薬として使用する場合は、花穂が褐色になりかけの頃、地上部を採取し日干後「漢方」や「和方」の要薬として知られている。

薬用部位は、『本草備要』（1694）に「茎、葉を用いる」、『本草求真』（1769）に「茎、葉を同じく用いる」とあり、元来全草を用いたようで、花穂のみを用いるという記述は見当たらない。

我が国の記録を調べると、林羅山（法名林道春）（1585～1657）の『多識編』（1612）に「夏枯草、宇留岐、又宇都保久佐と称す」とあり、穂積甫庵（生没不明）撰の『救民妙薬集』（1693）に「夏枯草、^{ほづみ ほんあん} うつぼ草ともいふ」と、更に^{ふかえのすけひと} 深江輔仁（生没不明）著の『本草和名』（1796）にも「夏枯草、和名、宇留比」とあり、古くから^{うつぼくさ} 靱草あるいは、郭公草の両方の名前が使われていたことが分かる。民間療法では、腎炎、膀胱炎、脚気などでむくみがあるときに使用した記録がある。また、花後の枯れた穂は、利尿剤、うがい薬などに使っていた。特に、我が国では昔から使用が多く、伊沢凡人著『和方』（1977）に、日本古来の療法に詳しく記述されている。

食用は、春に若い苗や若葉を摘んで、夏以降は花びらを採取して食用に利用する。花びらは、軽く茹でて酢の物や、生のまま衣をつけて天ぷらも可能である。

応用は、夏期暑気払いに、お茶にすることがある。

花言葉は、「優しく癒す」「協調性」「感謝」である。

